草いきれ

徳永直

現代新書 48

草いきれ　現代新書 48

昭和31年10月15日　初版発行　¥ 150

著者　徳永直

発行者　枝見静人

印刷者　藤本肇

発行所　東京都新宿区南山伏町一番地　株式會社　現代社
振替東京 102740番

© 1956. Tokunaga

藤本綜合印刷・鈴木製本

草いきれ

徳永　直

現代社

装

幀

池
田
龍
雄

目次

草いきれ……五
かえってきた人……一三四
ふみつけられる草……一六七
あかくなる顔……二〇〇
基地周辺……二二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

草いきれ

1

「お前どう思う、え？」

あぐらにしたひざの間にすり鉢をかかえこんで、すりこぎをうごかしながら、野村は自分でもうつつなしに言っている。

「おれにはわからなくなった」

掘り炬燵があって、炬燵やぐらがちゃぶ台になっていて、野村の鼻ッさきになるそのへんへ、一枚の写真がひろげたままになっていた。ごつい台紙の田舎ふうの写真であるが、前面に初誕生日をむかえたくらいの男の子の顔にピントがあわせてあり、それからからだをひいたようにして四十年輩の女の顔が映っている。髪の毛の少ない、頬骨のはった大きな顔で、黒い着物の肩がいかつく張っている。その女の子供でないことは不馴れな抱きッぷりでも見当つくが、いくら見直

してもかんこつのへんからおとがいにかけてうけとめきれない暗さがある。その暗さが写真のピントの加減でそうなったのか？　それとも地顔がそうなのか？　この写真一枚では見当つかないが、とにかくのみこみきれない。ぶきりょうだとは前もってことわってあるし、野村も承知であった。なじめさえすればいい、ぶきりょうでもなじむことが出来さえすれば夫婦はできる、と四十七歳の野村は考えているのであったが、その扁平にはったかんこつからあごへかけての鈍い線、なみはずれてながく大きな暗い線が気にかかるのだった。

「お父さんにわからないのに僕がわかるわけないじゃないか」

炬燵のむこうで高校生の長男が、明日はメーデーだというのでほっぺたへんまで赤インクをくっつけながらプラカードに絵をかいていた。「自由とパンをよこせー」などいうスローガンを書いてあるが、おやじの再婚の相談相手など十八歳の青年にはもうしんきくさくて仕様がないらしかった。口数が少ないわりに物事を考える性質で、かねて親父の相談相手にされるのであったが、なにぶん明日は戦後最初のメーデーであった。

「でも見た感じというものがあるだろう」

すり鉢の中の大麦を五合ばかり、ごろごろとやりながら、野村はやはりうつつなしな声でいっていた。

「暗い感じとか明るい感じとか、強つそうだとかやさしそうだとか――」

あいてはへんじせずに口笛などふいていたが、野村はまだひとりごとのように言っていた。

野村も今日はある学校に昔のメーデーの思い出話などをしにいって帰ったばかりで疲れていた。夕飯あとの茶碗などは女の子供たちが洗っといてくれるが、明朝の支度は野村がしなければならなかった。材料さえあればいくらか世帯なれてきている野村にとって何でもないが、育ちざかりの四人の子供と自分と五つの胃袋をいっぱいにするために、あれこれとやりくりするのは容易でなかった。玄麦であるこの大麦を少しでも精白して今夜のうちに水に漬けとかねば明朝のめしにはならぬし、講演にでかけるまえ駈けだしていって、戦争中から作っている道ばたの畑から大根を二三本ぬいてきて洗ってまでおいたのに、女の子たちは漬けることを忘れてしまったから、これも刻んで一夜漬けでもしておかんことには明朝もまた漬物なしということになるのであった。

ちかごろ節電というのがきびしいので、炬燵のある茶の間だけしか電燈を点けないようにしているが、となりの八畳にねる女の子たちは暗いと怖いというので、茶の間との間の唐紙を一枚あけてある。燈あかりの流れこんでいるそこへ、床の間の方を頭にして小学五年生の三女、女学校一年の次女、女学校三年の長女と順に枕をならべて眠っていた。昨年の五月、東京の大空襲中に母親に死なれてからこの子供たちも苦労して、世間の両親そろった子供たちに比べれば、煮炊き、洗濯といった仕事もいくらか出来る方であるが、なにぶん学校があるので当てにするわけにいかなかった。

「そんなに不安だったらことわればいいじゃないか」
とつぜん、右手に筆をもち、左手を遠くへつきだしてプラカードの絵をながめていた長男がつぶやいた。
「ことわっちゃ大井のおばさんに悪いの？」
「そんなことはないさ、気にそわなければ遠慮なく写真をかえしてくれといわれているんだ」
長男はしばらくだまってしまった。怒ったのでもなかろうが、こんどはプラカードをねかせて何だかしきりとぬたくっている。
「畳にインクをくっつけんな」
そんな瞬間はおやじとせがれ、大人と子供になっている。野村も大人の世界の、しかもこんな複雑なことを高校生の長男に相談したくはなかった。ことにおやじの再婚であるばあい口にだしにくいことだってあるのだが、野村にはそうでもするしかなかったのだった。野村は小説をかいて飯をくっている男だがむかしは印刷工であった。小説かきと印刷工とはやはり生活がちがい階級がちがっていた。そして二十年も経てば昔の印刷工仲間とはしぜん遠くなっていたし、九州の貧乏百姓の出身である野村には東京に親戚も少なかった。結局いちばん身近なのは少数の〝プロレタリア作家〟とよばれる小説かきや詩人であったが、いま再婚の相手、つまり写真の主は同じ小説かき仲間の大井峯の妹であるから、他の仲間も雙方を知っているせいかかえって慎重だし、

こっちもその人々の見解をききにくかった。

「じゃ、まア返すとするか」

すりこぎを動かしながら野村はつぶやいた。裁縫の先生で、からだが丈夫だ、などいうことにまだ未練はあった。こんな育ちざかりの子供四人もいてはよほど家庭的な人でなければ凌ぎきれないだろうなどとも思うのだったが、さればといってあんまりとっつきにくくても夫婦になれまい。

「大井のおばさん、他にも候補があるッていったんだろ」

顔を畳にふせたまま長男が言っていた。

「遠慮するなッていうんだから遠慮しなければいいじゃないか」

「そうだな」

それで一応眼の前がひらけた気持になって、野村はすり鉢をかかえて台所にいった。洗ってボールに水びたしにしてから、こんどは大根葉なぞを刻みはじめたが、やはり長男のようにさっぱりとするわけにいかなかった。写真の主は実地に逢ったわけでないし、写真をかえす気持にひっかかりはなかったけれど、いま一人あるという候補、大井峯の説明では女子大出身で、絵も描く人、いま雑誌の編集などやっている。きりょうも悪くはないというその人が、果してこんな家庭にきてくれるだろうか？　それはこちらがあんまり身の程知らずではないだろうか？　という気

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

かしてくるのだった。写真だけでも見せてもらいたいという欲望はありながら、しかし大井峯の力で言いだしてくれなければ、この写真は気にそわぬ、いま一人の人の写真を見せてくれと、野村の口からいいだす勇気は出そうにないのだった。

「しかし、女子大を出てるような人が、こんな家庭にとびこんでくるとは考えられないもんな」

台所でいうと、

「そりゃわからんよ」

と茶の間で長男が答えた。

「先方でいうんだから何パーセントか可能性があるんだよ」

「そうかな」

そういわれると野村も自惚れてみるのだった。成程、おれだって小説かいてめしをくってること二十年。四人の子持ちというハンデキャップがなかったなら、つまり一対一なら、どんな女子大出か知らんけれど、提燈に釣鐘というほどのこともあるまい。

「じゃ、返すとするよ、大井峯さん、まさかそれで気を悪くするということもないだろう」

結局、野村は写真を、大井峯が指名していった同じ作家仲間の川島貞子のところにかえすことにきめた。写真の主が大井峯の妹であるという点で、やはり若干の気怯れはあったけれど、あの晩の大井峯の容子や言ったことなど思いだしてもそれほどむずかしいものとは野村も考えなかっ

たのだった。
「お父さん、大井さんがきた」
つい一週間ばかりまえ、もう夜になってから、野村が仕事していると、長女がうしろにきていった。
「おばさんもよ」
「おばさん？」
詩人である大井悠吉はときおりくるが、細君の大井峯はめずらしかった。野村はいそいで玄関へ出ていったが、たいへん有難く思った。それは数日前、適当な再婚の相手があるなら斡旋してくれぬかと手紙で頼んでいたからだった。
「あら今晩は——」
ふとって腹がつきでているのでそっくった姿勢になってコートを脱ぎながら玄関をあがってきた大井峯は、夫の悠吉について野村の仕事部屋になっている六畳にすわると、心やすげに室の中をみまわしたり、茶盆をかかえてきた長女や、そのうしろについておじぎしにきた次女や三女を見かえったりして、持ちまえの鼻にかかった声でにぎやかに話したり笑ったりした。
「お手紙みたもんでね——はい、今晩は、こちら一ばん上の娘さん、ふーん、こっちは、へえ、そう、みんなもう大きいんだわね」

草いきれ

野村はひっちらかした原稿用紙や、まるめた座蒲団や、そこらをおし片づけてすき間が出来たところへひざをそろえて坐ったが、こうやって大井たち夫婦の、そろって世帯をはってるもののちゃんとした身装やものごしのまえではこっちが小さくなる気がした。

「かねて貞子さんなどと噂はしてたんですよ。あなたが会合の途中で夕飯の支度しなくちゃならんからなんて、席を外されたりするもんだから、よッぽど困ってらッしゃるんだろうなッて。奥さん亡くなられたのいつでしたッけ？」

「丁度一周忌です」

「そうそう大空襲のときだったんですッてねえ、ふーん」

話の途中でも、女の子たちが何かかかえて室に入ってきたりすると、大井峯は頬に笑をうかべたままでじいッと見入っている。人の好い夫の悠吉の方はあぐらのひざに肩肘をつっぱって、細君と野村と話手がかわるたんびせわしなくそっちへ視線をうつしかえているのだった。

野村と大井夫妻とは同じ文学団体員としてずいぶん古くから知っていたが、個人的とか家庭的とかいうつながりはあまりなかった。それは亡くなった野村の妻が文学などに興味もたない性質からもきていたが、やはり野村がだしぬけに労働者の生活からそこへ移ってきたというかかわりの少なさということがあった。だから大井峯に仲人を頼んだとしても不自然ではないだろうが、その手紙にめんめんと野村は書いたのだった。つまり、野村のようなやもめのばあい、労働者の

家庭では、ふつうその親類縁者が、割れ鍋には閉じ蓋、なんとかつくろってくれる慣習であるが、自分はもう昔仲間とも遠くなったし、そんなわけで云々と。そして野村の考えではそんな事情は年令からも若い頃労働した人という点からも知ってる仲間作家では大井峯が一ばんわかってもらえると思ったのだった。

「それで、ね、あたし、ぶっつけにいうんだけれど、いいかしら？」

ひざの上につきでた腹をかさねるようにして前かがみになりながら大井峯が言いだした。

「あたし、こんなこと不馴れだもんだから」

ほんとに彼女は顔をまっかにしていた。

「え、どうぞ、どうぞ」

大きなあかい頬も、もりあがった大きな肩も、呼吸ぎれでゆれているが、下唇の左右をつりあげるようにして上唇を丸くするとなにか突進してくるような気魄があった。

「つまり、ね、候補者が二人あるの」

「は？」

「一人はあたしの妹、いい？　ね、いま一人は名前はまだいえぬけれど、ある雑誌の編集をしている、女子大出の人——」

すると野村はもうまばゆいような顔になって、あいてから視線をそらしてしまい、ひざの上の

自分の手をみつめながら、大井峯の呼吸ぎれする、しかし熱いような声をきいていた。――妹という人は永らく裁縫の先生をしていた人で初婚。雑誌の編集などしている女子大出の人も子供はないが再婚。どっちも年令は四十歳を過ぎている――。

「それで、ね、あたし、妹の方をさきに紹介するけど、あたしの身勝手だというふうにとらないでいただきたいんだけど」

大井峯はますますあかくなりながら大きなからだをよじらせるようにした。野村もまた先方にそうされると自分のからだの置き場所がないように恐縮するのだった。

「ぶきりょうだし、年令も四十を過ぎてるんですよ」

「いえ、いえ」

「だけどあなたの手紙に裁縫のできるおとなしい人と書いてあったもんだから、あたしもたいへんぶしつけだとは思ったんだけど、そんなこと考えたんですよ」

「いえ、いえ、もう」

野村はいわれていることが何であるかと吟味するよりも、大井峯の好意にたいしてもう頭ばかり下げていた。大井峯の妹が四十すぎているのはわかっても正確にはいくつなのか、裁縫の先生を現在もしているのか、そんなこと質問することも忘れていた。

「でも、ほんとにあたしの妹だからッて遠慮しないで下さいね」

それも、自分に直接では野村の方もいいにくいだろうから、妹のばあいにかぎって川島貞子を仲人にたのむから、そっちへ返事してくれと大井峯はいった。そして妹の写真は川島貞子の方からまわすから、それが気にそわなければその上で、またいま一人の候補者の写真をみせるなどと語った。野村の住いは小田急沿線、大井夫妻の住いは西武沿線なので一時間以上かかる。おまけにその頃は私鉄の終電は早かったから一応の話がすむと、三人の間に共通な文学上の仕事の話もしないで、大井夫婦は帰っていった。

「じゃ、ほんとに気にそわなかったら遠慮なく写真かえして下さいよ」

K駅までおくっていって別れるときも、大井峯はくりかえしそう言ったのだった。

そして野村は共通に知っている同じ作家仲間の川島貞子からおくってきた写真と三日ばかりというものは首ッぴきしたのだが、どうものみこみきれない。だいいち自分の女房候補の写真を子供たちの眼からにもしろかくす気がしない。それどころかしまいには子供の判断まできくようでは無理といわねばなるまい——。

メーデーが過ぎて数日たって、野村は川島貞子を訪ねていった。野村たちは文学団体の会合で、比較的広い住いである大井峯の家や、そのすぐ近くにある川島貞子の家によく集まったが、このときは改まって川島を訪ねたのだった。

「はい、たしかに。じゃ、そのように大井峯さんに伝えましょう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton